

ふるさとの昔話

和田川の おその水道

昔の和田川は、水量が多く、ところどころが深い淵になっていました。新橋の下手には「おその水道」と呼んだ深い淵があったといわれます。今回はこの淵に伝わるお話です。



和田川(新橋付近)



身を投げたおその

江戸時代のころです。吉原宿は大変繁盛してにぎわいました。この宿場におそのという若い芸者がおり、売れっ子で、みんなからかわいがられていました。

ところが、おそのはいつしか体が弱くなり、働けなくなりました。すると主人は、稼ぎがないと言つて、殴つたり、け飛ばしたり、毎日いじめました。

おそのは悲しくなつて、主人を恨みながら、この淵に身を投げて死んでしまいました。それから間もなく、おそのの幽霊が出るといううわさが広まり、夜遅くここを通る人がなくなりました。

出なくなつた幽霊

この淵は吉原宿の東のはずれで東海道です。幽霊の評判が広まつて、吉原宿がさびれては困るし、第一おそのがかわいそうだという声の人々の中から起ききました。

そこで、ある寺のお坊さんが、ほこらを建てて「おその地藏」をまつり、お経を読んでおそのの霊を慰めました。すると幽霊は出なくなりました。

深い淵があつたよ

依田橋の渡辺つるさん(九十歳)は「残念ながらおそのさんの話は聞いたことがないよ。でも、昔は和田川の水が多くて深い淵もあり、身投げしたら死んでしまうような場所もあつたね。昭和の初めころは砂利船が通つたり水車もあつて、人々は川をもつと身近に感じていたね。東海道筋にはうっそうとした松林があり、幽霊のうわさがたれば、そりやあ恐かつたでしょうね」と語ってくれました。



渡辺つるさん

地名の由来

いりやませ
入山瀬



△入山瀬駅前

平安時代に慈覚大師がこの地に竜泉寺という大寺を創建したといわれますので、入山瀬村はかなり古い村であるといえます。昔、富士山の古期溶岩が潤井川の流れをふさいで、(仮称)天間湖ができました。たまたま大量の水は瀬をつくつて下流へ流れたので、この付近を入山瀬と呼んだという説があります。入山瀬村は明治二十二年に他村と合併して鷹岡村をつくりました。

こちら編集室

来ました、来ました一度に二百五十通。広報ふじ五月二十日号に「市長への手紙」の用紙を折り込んだところ、わずかな期間にどつと御意見、御提言などをいただきました。渡辺市長が一通一通丹念に見た後で、担当課に回されますが、この整理役も広報広聴課。担当のNさんは、うれしい悲鳴をあげ、がんばっています。御返事が届くのはもう少し時間がかかります。お許しください。

ニイハオ 你好

19



▽多い自転車通勤



嘉興市の交通事情

嘉興市のメインストリート中山路は富士市役所前の青葉通りと同じくらい大きな道路です。上下各2車線の自動車道と上下各1車線の自転車道、歩道があり、プラタナスなどの街路樹が植えられています。一般人民の最も大衆的な交通手段は自転車なので、自動車道がすいているのは対比的に自転車道に多くの交通量があります。ですから、朝夕は自動車ならぬ自転車ラッシュとなります。北京など大都市では交通ルールがよく守られていますが、地方都市はどれも、もう一歩といった状態です。街角には「家庭の幸福のために交通安全を」という看板が多くあり、交通事故が社会問題の一つになっていることを物語っています。